

小論文は、重要な受験科目の一つですが、志願書作成や面接でもそのノウハウは必要です。不定期で、HPに掲載します。ご活用下さい。

○大学編入

課題

「在宅医療について」

解答例

日本では在宅医療を重視した対策が推進されている。その理由の一つとして、住み慣れた家で、親しい友人や家族にあたたかく見守られながら、人生の最期を迎えたいと願う高齢者が増加していることが挙げられる。

住み慣れた家で医療を受けることは、病院の病室で受ける医療と、内容は同じであっても患者にとっての心持ちは異なるを考える。家には、住んでいる人それぞれの匂いや、慣れ親しんだ家具があり、患者にとっての思い出が詰まった生活環境が広がっているからだ。病院内の病室では、看護師が他の患者さんをケアするときの音がしたり、医療機器の音が響いたりするし、また、家族とも決まった時間でしか会うことができず、自分自身のQOLを保ちながら医療を受けることは困難になる。これからさらに高齢化が見込まれる日本社会の中で、高齢者が自分らしく最期の時まで生活するためにも、在宅医療が不可欠だ。そのための課題として、迅速で安全な医療が24時間いつでも提供できる医療体制を整える必要があるだろう。病状が変化しても、医療機関との連携がスムーズに行われることが分かっているならば、自宅で心静かに過ごすことができるからだ。また、訪問看護師や介護士の定期的な訪問を通し、病態の変化を細かくチェックし、異常時の早期発見、迅速な対応につなげられるようなシステム作りも大切だ。在宅医療の推進が求められる今、サービスの充実、そのためのシステム作りが様々な方向から模索されている。多くの課題を抱える在宅医療の在り方に、医従事者の一人として、患者のQOLを保てる環境整備のために、気がついたことなどがあれば提言していきたい。

○助産師学校

課題

「育児不安について」

解答例

育児をしていくなかで、「育児不安」を抱えることは母親になれば当たり前のことである。大切なことは、それに対してどう対処していくかであると考えます。私が勤めている産婦人科でも「育児不安」を訴える母親は少なくない。

あるとき、「子供を産んだらおっぱいは勝手に出てきてくれると思っていた」と言う産褥婦がいた。妊娠中のことについて書かれている様々な雑誌はあっても、出産後の身体の変化などについて書かれてあるものはほとんどない。私は、その産褥婦について、母乳が作られる過程について説明し、授乳の際の注意点などを話した。産褥婦は、母乳について初めて知ったと、嬉しそうな顔をしてくれた。

「育児不安」は、大なり小なり育児をしていくなかでぶつかる壁だと思う。育児不安をなくすことはできない。しかし、少しでも軽くすることはできるのではないかと思う。同じ時期に同じ病院で出産した母親達を集めて、お互いの悩みや愚痴を言い合える場を設けることは、近くに両親や親しい友人がいない母親にとってほっとする場になることだろう。あるいは、知識の乏しい若年妊婦や自らシングルマザーになることを選んだ女性に対しては、保健師が来訪するよう助産師から連絡をいれ、彼女たちが退院した後も密な援助をすることもできる。また、障害児を抱える母親へは、妊娠中から障害に対しての知識を提供することはもちろん、障害児へのサポート団体の情報を伝えることなどを通じ、母親たちが抱える不安を軽減できるのではないかと考える。

核家族化の増加等、社会背景を解決することはできないが、助産師として現代の母親が抱える「孤独」を埋めることで「育児不安」、さらには「育児放棄」などの虐待の減少につながるのではないかと考える。